

# 活動理論に関する一つの視点：ヴィゴツキーとピアジェ

## One perspective on activity theory: Vygotsky and Piaget

高取憲一郎 TAKATORI Kenichiro (教授 発達科学講座)

キーワード：活動理論，ヴィゴツキー，ルリヤ，ピアジェ

Keywords: activity theory, Vygotsky, Luriya, Piaget

(注) 本稿は、2013年9月23～24日に大阪大学理学研究科で開催された第3回複雑系科学シンポジウム「宇宙、物質、生命、人間と社会の動的構造と発展」における報告原稿(演題「活動理論の展開：ヴィゴツキーとピアジェ」)に、新たに「5 おわりに」を加筆したものである。シンポジウムでの報告をお勧めいただき、さらに当日の司会もご担当いただいた白井浩子岡山大学名誉教授に感謝申し上げます。

### 1 ヴィゴツキーとピアジェ

以前は、ヴィゴツキーの心理学とピアジェの心理学は異なるものであるという見解が大勢を占めていた。それは、ピアジェの自己中心的言語に対してヴィゴツキーが批判したということ根拠に両者の主張は水と油ぐらいに異なっているという説明もなされていたように思う。

ピアジェの自己中心的言語というのは、ピアジェの知能の発達段階の第2期に出現するとされるものである。ピアジェは、人間の知能の個体発生を四つの時期に区分した。①感覚・運動期(0～2歳)、②前操作期(2～6, 7歳)、③具体的操作期(6, 7歳～11, 12歳)、④形式的操作期あるいは抽象的思考期(11, 12歳～)である。自己中心的言語はこの②の時期に出現するものであるが、ピアジェは、この自己中心的言語が子どもが社会化されていくときに、社会化が不十分な過渡期としてのこの時期に出現すると考えた。これに対して、ヴィゴツキーは子どもは(あるいは人間はと言い換えてもいいが)もともと社会的・集団的な存在であり、個の出現はその後で派生するものであると考えた。このヴィゴツキーの立場からすれば、自己中心的言語は、出発点において社会的存在である子どもが個として自立していく過渡期に出現する現象である。

以上のように、従来は、ヴィゴツキーとピアジェは社会と個人の関係をめぐってまったく正反対の立場に立っているという考えが主流であった。ピアジェは個から社会へという方向で考えていたし、一方、ヴィゴツキーは社会から個へという方向で考えていた、というのが一般的な通説として説かれていた。

ところで、近年、このように異質なものとしてとらえられてきたヴィゴツキーとピアジェの心理学を統合していこうという流れが、ピアジェ派の中から出てきている。たとえば、

A. Tryphon & J. Vonèche (Eds) *Piaget-Vygotsky: the social genesis of thought*, East Sussex: Psychology Press, 1996. この著書の中心となる視点は、ピアジェの知能の発達理論をヴィゴツキーの最近接発達領域という枠組みで補強していくという試みである。私は、ヴィゴツキー・ピアジェ問題を考えるときには、対立点よりも共通点のほうに注目するほうが生産的であると以前から考えているのであるが、上に述べたようなピアジェ派の動向を見ると、ピアジェ派の中の親ヴィゴツキー派の人たちも同様に考えていたのではないかと思うのである。そのために、このような現在のピアジェとヴィゴツキーの統合という形が現れてきているのではなかろうか。

このように考えるときに重要になる視点は、ヴィゴツキーもピアジェも、実は共通に、人間を二つの軸の上で考えているという点をつかんでおくことではないかと思う。

まず、ヴィゴツキーからみていくと、彼は人間というのは二つの側面によって存在すると考えていた。一つは、人間と物との関係、もう一つは人間と人間との関係。芝田進午の用語を使えば(芝田進午『人間性と人格の理論』青木書店、1961年)、労働の二つの側面、すなわち、技術的過程と組織的過程とに対応する二つの側面といってもよい。

人間と物との関係に関しては、ヴィゴツキーの弟子であったレオンチェフたちのおこなった媒介的記憶とか媒介的注意の研究(レオンチェフ「記憶の高次形態の発達」、レオンチェフ『子どもの精神発達』松野豊・西牟田久雄(訳)明治図書、1967年所収、122-162. Vygotsky, L. S. *Mastery of memory and thinking*. In Vygotsky, L. S. *Mind in society*. Harvard University Press, 1978, 38-51.)、あるいはスミルノフたちのおこなった不随意的記憶の研究(Smirnov, A. A. & Zinchenko, P. I. *Problems in the psychology of memory*. In M. Cole & I. Meltzman (Eds.) *A handbook of contemporary soviet psychology*. Basic Books, 1969, 452-502.)などがある。前者は、人間が物に対して働きかけるときの道具という媒介物の働きが心理過程の形成にどのような影響を与えるかを研究したものであるし、後者は目的に向かって人間が活動していくというその活動の線上で記憶という心理過程が生ずることを研究したものである。

また、コミュニケーションの側面に関しては、ヴィゴツキー自身の有名なキーワードとなっている最近接発達領域お

よび、心理間機能の心理内機能への内化あるいは内面化という見解が注目される。ここでは、ヴィゴツキー自身がよく例として引用する、母と子が一緒に茶碗を見ているという場面で、子どもに随意的注意が形成されるという例を紹介しておきたい。

母親が茶碗を指差しながら、「ほら、あそこに茶碗があるよ」と子どもに向かって言う。そして子どもは母にうながされて茶碗を見る。この段階では、子どもが茶碗を見るという行為（注意という心理過程）は、母と子の間に分かちもたれているところの心理間機能（人と人の間に分かちもたれている機能）である。ところが、これを何回か繰り返しているうちに、子どもは自分の力だけで「ほら、あそこに茶碗があるよ」と考えて（あるいは自分で自分に言い聞かせながら）茶碗を見る（注意する）ようになる。この段階では、注意という心理機能が、子ども個人の内に確立されて、個人の心理内機能となっている。これを内化とか内面化とか呼んでいる。この段階では、最初は子どもの外部から子どもに「ほら、あそこに茶碗があるよ」と呼びかけていた母親が、あたかも子どもの内部に入り込んだかのごとくに、子どもの内部で子どもに「ほら、あそこに茶碗があるよ」と呼びかけている。それにうながされて、子どもは茶碗を見る。これを、心理間機能が心理内機能へと内化したと考えた。

これは、別の角度から見れば、ヴィゴツキーの最近接発達領域という概念でもある。最近接発達領域というのは、子どもが一人でできる発達水準（現実的発達水準）と、他の大人あるいは子どもの助けをかりてできるようになる発達水準（潜勢的発達水準）との間の距離と定義されているものであるが、ヴィゴツキーは教育的な働きかけはこの領域においてなされるべきだと主張した。上の、母と子の注意の形成の例で言えば、まだ、随意的注意の形成のできていない子ども（現実的発達水準にある）に対して、母親が援助してあるいは協力して、子どもが自力で随意的に茶碗を注意できるようになった（潜勢的発達水準に到達した）、という関係にある。

一方、ピアジェの場合は、人間と物の関係、および人間と人間との関係という二つの軸の上で人間を考えていたとみなすときに、彼の同化と調節という概念、および知能の発達と対人関係の発達はコインの両面であるという主張がキーワードとなる。

ピアジェの同化というのは、人間が外部の物質を加工を加えながら自分の側へと取り込んでいく過程であり、調節とは外部へと適応していくために自分の側を変化させていく過程である。瀬戸明が主張するように（瀬戸明『現代認識論と弁証法』汐文社、1978年）、この同化と調節という二つの過程は、労働と同じ過程である。労働の過程においては、人間は道具を媒介物として用いて外部の自然に対して働きかけ、加工を加えながら自然を変化させ、同時にその反作用として自分自身も変化し、そして認識を新たにしていく。これは、

労働過程における作用と反作用と言われる関係である。

さらに、ピアジェのもう一つのキーワードである、知能と社会関係（対人関係）はコインの両面であるという主張は、わが国ではほとんど注目されていないが、ピアジェ・ヴィゴツキー問題を考える際にきわめて重要な鍵となる。ピアジェの知能の発達段階の第二の時期（前操作期）における、自己中心的思考というのは物事を一面的にしか考えることができない時期であるが、それはまた対人関係の面においても自己中心的にしか行動できない時期であり、他者の立場に立って行動するということができない時期でもある。ところが、次の具体的操作期になれば、自己中心的思考と自己中心的行動が克服され、統合されていく。このように、知能の発達と社会的行動の発達は対応していて、まさにコインの裏表の関係にある。このようにして具体的操作期以降は、知能と社会的行動（対人関係）の両方に均衡の取れた構造が出来上がる。協調的で均衡のとれた知能と対人関係を可能にする群性体という構造が具体的操作期以降に形成された結果である。このために、われわれは、多様な考え方や視点を取ることが可能となり、また、さまざまな価値観や世界観をもつ人々との間に多面的な人間関係をもつことが可能となるのである。

以上述べたことから、ヴィゴツキー、およびピアジェの両者ともに、人間と物との関係と人間と人間の関係の二つから、人間という存在は考えられるということを共通に主張していると考えるのである。

## 2 ヴィゴツキーとピアジェのその後の展開：ルリヤとジュネーヴ学派

ヴィゴツキー心理学の展開という点では、彼の弟子であったルリヤの研究の中から二つを紹介してみたい。実は、欧米では（その当時の話なので西側ではといったほうがいいと思われるが）ヴィゴツキーの研究が注目されるよりもずっと以前から、ルリヤの研究はよく知られていた。それは、彼の論文が極めて明瞭でわかりやすかったことが理由であった。ルリヤの研究がよく知られているときに、ヴィゴツキーの研究はといえば、難解な『思考と言語』という著書が知られているくらいであった。しかも、米国で出版された英訳本は誤訳が多いことで有名で、ほとんどインパクトを与えていなかったと思われる。

さて、ルリヤはモスクワの研究所にいた頃、その附属幼稚園に一卵性双生児の双子が入園してきた。ところが、この双子はそれまでずっと二人だけで遊んでいたということから、二人の間だけで通用する会話は十分できるのであるが、他の子どもたちとの会話が十分にできない。同年齢の子どもたちに比べて、兄弟だけで会話をしていたことが原因となって、言葉の発達が遅れていたのだ。そのために、単純な遊びは他

の子どもたちとの間でできても、複雑な遊びはできない。そこで、ルリヤはこの双子を別々のクラスに入れて他の子どもたちと交流させることにした。さらに、特に言葉の発達が遅れていた一人については、言語訓練プログラムを施すことにした。その結果は、彼らの言葉の発達は回復し、他の子どもたちと同等にしっかりと遊べるようになった。この双子研究は、言語教育と集団生活における他の子どもたちとの交流が子どもの発達にとってきわめて重要であることを明らかにした。そして、言語によって、人間の高次心理過程は支えられていることを示す結果になった (Luria, A. R. The making of mind : a personal account of Soviet psychology. Harvard University Press, 1979)。大久保忠利 (大久保忠利『全面発達の国語教育』一光社, 1981 年) が指摘したように、ヴィゴツキーとルリヤの心理学においては、言語は人間の人格と意識の下部構造として位置づけられたのである。

もう一つの中央アジア研究は次のようなフィールド調査である (ルリヤ『認識の史的発達』森岡修一 (訳) 明治図書, 1976 年)。調査された時期は、1930年代の初めであるが、まだヴィゴツキーが生きていたときであった。場所は中央アジアのウズベキスタンとかキルギスというソビエト連邦を構成していた草原のシルクロードの一角にあり、農業と牧畜を主な生業としている地域であった。1917年のロシア革命の後まだこのような地方においては教育の普及が十分に行われていなくて、読み書きのできない人たちがたくさん存在していた。このような、発展途上の過程にある、はげしく変動している地域にヴィゴツキーたちは注目した。皇帝の支配していた、封建的な農業・牧畜社会から社会主義の社会へと大きく変動していくフィールドを舞台に、そこに住む人間の心理がどのように変化していくのかを調査するための絶好の機会としてこの地域が注目されたのだ。

そこで、彼らは五つの集団を調べる事にした。それは、言語教育の水準と社会生活への参加の度合いが異なる五つの集団であった。①イチカリ (イスラム文化圏における女性専用の部屋) の女性たち、②自営の農夫たち、③幼稚園教師になるために短期講習会に参加している女性たち、④コルホーズの幹部活動家たち、⑤師範学校的女子学生たち、の5集団であった。①から⑤にむかって、言語教育の水準と集団的社会生活への参加度が増加していくと考えられた。

この五つの集団に対して心理過程を調べるさまざまな調査を行っているが、そこから明らかになったのは、言語教育水準と社会生活への参加の程度の高低によって、心理過程が直観的・行為的・実践的段階 (低い段階) から、抽象的・言語的・論理的段階 (高い段階) へと変化していくことであった。たとえば、代表的な調査の一つ引用しておく、「ハンマー、オノ、ノコ、丸太、という四つのものの中から仲間はずれを一つ選びなさい」という問題が「抽象と一般化」という調査のところにある。これは、子どもの知能検査などにも

ある問題であるが、ハンマーとオノとノコは道具というカテゴリーで括れるので、道具ではない丸太というのが正解になるのだが、②の集団に属する人たちの中には、「ハンマーもオノもノコも丸太を切るときに使っているのみな同じ仲間であり、一つだけ切り離すことはできない」というような答えがかなり出てくる。また、さまざまな色の毛糸の巻き束を目の前において、色の名前を言わせる問題では、①の集団のイチカリの女性たちに場合は、「青、赤、白、黒、黄色」などというような基本色で答えるよりも、「空の色」「子豚の色」「ケシの色」などのような具体的な事物の色で答える人たちがたくさんいるということもわかった。

以上の、ルリヤの調査では、言語教育と社会生活への参加の程度、すなわち社会生活のいわば欠くことのできない道具としての言語も含めた人と人との交流あるいは交渉というような要因が心理過程の形成に大きく関係しているという点が重要である。これは、ヴィゴツキーの基本的な考えである、心は社会により形成されるという視点に関わる重要な論点である。他の人との相互作用は当然のことであるが、言語を重視しているのは、言語を通じてこそ人間は社会とつながることができるということになるからである。社会とつながらなければ、心が社会によって形成されることもできない。このことをよく表しているヴィゴツキー理論を描いたビデオがある。1990年に英国BBCが製作して、NHKでも放映された「見える、聞こえる、ソビエト：ヴィゴツキー理論」というビデオである。これは、ソ連崩壊前のソ連の障害児教育の様子を取材したものであるが、そこで鮮明に現れているのは、言語を十分に使うことができない目と耳の障害を持っている子どもたちに指文字を教えて、とにかく外部の人間とのコミュニケーションを取るための言語に代わる手段を獲得させるという点が、取り組みの最大の中心となっているという点である。目が見えなくても耳が聞こえなくても、とにかく皮膚感覚を利用した指文字でのコミュニケーションを身につけさせる。それが、言語を使用できない子どもが成長するためには絶対に必要であるという基本的な考えであるように思われる。

一方、ピアジェ派の動向については、弟子のペレ・クレルモン (Perret-Clermon, A. N. Social interaction and cognitive development in children. London: Academic Press, 1980) およびパパンドロップルーとキルチャーの研究 (Berthoud-Papandropoulou, I. & Kilcher, H. Relationships between the clinical method and the zone of proximal development in a constructivist approach to language acquisition. In A. Tryphon & J. Vonèche (Eds.) Piaget-Vygotsky : the social genesis of thought. East Sussex: Psychology Press, 1996, pp. 171-187.) を紹介しておきたい。いずれも、ピアジェの知能の発達研究 (発生的認識論) とヴィゴツキーの最近接発達領域という概念を組み

合わせて新しい心理過程を形成しようという試みである。

ペレ・クレルモンの研究は、ピアジェの保存という知能の形態の形成に、コミュニケーションが促進的役割をするということを明らかにしたものである。保存というのは、ピアジェの認識の発達段階の②から③にかけての時期によく取り上げられるものであるが、見掛けの姿とか形に関わらず同じものは同じであるということが理解できるかどうかということである。たとえば、量の保存とか数の保存というものがある。量の保存で説明すると、一つのコップからもう一つの細長いコップに水を移し代えたときに、底面積は小さくなるのだが、水面の高さは上昇する。そのときに、底面積と水面の高さの変化に惑わされることなく、水の量は同じであることが理解できていれば保存が獲得されているということになる。

まだ保存の獲得されていない子どもを、保存がすでに獲得されている子どもと一つの集団に入れて、大きさ・形の異なるコップに各自の分け前が等量になるようにジュースを分配するという体験をさせると、そのような体験を持たない子どもに比べて、1週間後に調べたときに保存の獲得できた子どもが多かった。知能の発達水準の異なる異質な子どもを組み合わせ、交流させることにより、知能の点で促進効果が見られた。ピアジェの弟子のドワスはこれを、社会的相互作用が知能に先行し、社会的相互作用によって個人の知能は形作られると考えて、個人間協調（コミュニケーション）は個人内協調（知能）に先行し、個人内協調を増進すると表現している（Doise, W. On the social development of the intellect. In V. L. Shulman, L. C. R. Restaino-Baumann, L. Butler (Eds.) The future of Piagetian theory. Plenum Press. 1985.）

もう一つの、パパンドロップルーとキルヒャーの研究は、フランス語のジェロンディフという構文を子どもたちが使えるようになるために、大人が適切な質問をしてやるのが大きな効果をもつということを示している。たとえば、「フランソワは食事をしながらテレビを見ています」（これは、実験者が子どもに示す問題文である）というジェロンディフ構文がある。この、同時に二つの行動が併行して行われているということを表しているジェロンディフ構文がまだ獲得されていない子どもに対して、実験者が（1）文中の人物（この場合はフランソワ）と当該の子ども自身の行動を比較させるような質問とか、（2）問題文には二つの行動が述べられているにもかかわらず、当該の子ども自身が言及しなかった内容に対して注意を向けさせるような質問、（3）問題文中の行動の同時性に対して注意を向けさせるような質問、などをすることによって、この短い時間の間に子どもはジェロンディフ構文を理解し、使うことができるようになった。このような大人から子どもへの一連の質問は、ジェロンディフ構文という新たな心理過程を生成させるという役割を果たしてい

るのである。この結果は、ヴィゴツキーが提唱している発生に関する個人と社会の関係についての四つの関係（微発生、個体発生、社会・文化的発生、系統発生）の中の微発生（短時間の間に生ずる変化）に相当する発生を証明するものであると彼らは考えた。以上が、パパンドロップルーとキルヒャーの研究である。

以上の二つの研究に関しては、ピアジェ派のブロンカール（Bronckart, J. P. ），彼はピアジェ派の中でも特にヴィゴツキーの研究に精通している人であるが、が次のような興味深いことを、ピアジェ生誕100周年のシンポジウム（1996年にスイスのジュネーヴで開催された国際シンポジウム『The growing mind』における報告）の中で言っている。ピアジェの知能の心理学というのは、知能を建築物である家にたとえるとすると、前操作期に出現する記号的機能（これらの記号的機能には5種類あり、複雑さの順に、延期模倣、象徴遊び（ごっこ遊び）、描画あるいは線画、心像、言語である。これらはすべて、現前しない事物を能記を使って表現する機能である。）を建築材料としてのレンガと見なせば、具体的操作期に出現するコミュニケーション機能は、接着剤の役割をする。このレンガと接着剤によって知能という家が立ち上がる。

### 3 ヴィゴツキーとピアジェを統合するモデル：チャプマンの認識の三項関係モデル

前節で触れた、ジュネーヴ学派のブロンカールのこのような説明をまさに具体化するようなモデルが存在するのである。それは、チャプマンの「認識の三項関係モデル」（Chapman, M. The epistemic triangle : operative and communicative components of cognitive competence. In M. Chandler & M. Chapman (Eds.) Criteria for competence. Hillsdale: Lawrence Erlbaum Associates, 1991, pp. 209-228.）と呼ばれるものである。チャプマンは、ヴィゴツキーとピアジェの心理学を統合していこうと努力していた将来を囑望されていた若き研究者であったが、惜しくも夭逝してしまった。

彼の言う「認識の三項関係」とは、能動的主体と知識の対象の間、および対話者と知識の対象の間には操作的相互作用が存在するし、能動的主体と対話者との間にはコミュニケーション的相互作用が存在する。この三項関係図式が七、八歳を境目にして全体としてまると子どもの内部に内化（内面化）されるとするのである。すなわち、ピアジェの知能の発達段階区分で言えば、前操作期から具体的操作期にかけての移行期において内化されるとするのである。

ところで、チャプマンは彼の図式が内化されるのを説明するのに最適のモデルとして、ヴィゴツキーの弟子であるガ

リペリンの知的行為の多段階形成理論を持ち出してくる。ガリペリンの知的行為の多段階形成理論とは、①準備的段階（定位的基礎の形成）、②外的、対象的行為の形成の段階、③外言の段階、④つぶやき（外言から内言への移行）の段階、⑤内言（内的行為）の段階である。

チャプマンによれば、ガリペリンの以上のような知的行為の多段階形成理論で一番大事なところは、段階②から段階③へと移るところである。すなわち、外的行為が言語の平面へと移されるという点である。それはなぜ重要かという点、段階②で主体（学習者）は対象に対して直接に働きかけ、それによって対象の本質的な特徴や関係に注意を払うことが可能となる。すると、対象についてのイメージをつくり出すことが可能となる。そこで、次の段階で、それらのイメージと言語を結びつけることによりイメージは安定した堅固なイメージとして主体（学習者）の中に固定され、同時に対象の本質的な特質や関係についての意識や自覚が作り出される。

また、この外言の段階で重要なことは、主体（学習者）が自分の目の前にいる他人（この場合は実験者という大人）にも聞こえる形で判断基準であるとか自分の考えなどを述べることであるが、そうすることによって自分の考えていることを他人にもわかる形で十分に展開された形で、正確に表現することが求められる。このように、他人とのコミュニケーションの必要性という社会的圧力の下で、主体（学習者）は対象の本質についての言語化をおこなうことにより、その後の段階④、段階⑤で形成されていく意識に社会性がもたらされることになる。

## 4 新ヴィゴツキー派の発展

これまで述べてきたところでは、ピアジェ派のなかでのピアジェとヴィゴツキーとの統合が中心であったが、ヴィゴツキーの心理学も特にアメリカにおいてコミュニケーションとか共同体という概念を加えることによって新たな展開を示すことになった。

30年前あたりから、ヴィゴツキーの心理学はロシアを飛び出して欧米へと拡散していった。そのきっかけとなったのが、ヴィゴツキーのいくつかの論文を英訳して1978年に米国で出版された「Mind in society」(Vygotsky, L. S. Mind in society: the development of higher psychological processes. Harvard University Press, 1978)という著書であった。また、コミュニケーション研究を介してソビエト心理学とアメリカの認知心理学とが出会ったという点も重要である。これを表しているのが、ソ連とアメリカの研究者のコミュニケーションと認識過程をめぐる合同シンポジウムの記録であるL. H. Strickland (Ed.) Soviet and western perspectives in social psychology, Pergamon Pressとい

う本が1979年に出版されていることからわかる。

このような米国内の状況を背景にして、ソ連へ留学したアメリカの認知心理学者である、コールやワーチによって新ヴィゴツキー派が形成されることになる。それは、コール (Cole, M. Cultural psychology : a once and future discipline, 1996) の第五次元プログラム（個人の学習は個人をとりまく対人関係、集団、組織、地域、国というような環境によって影響されるとする学習の菜園モデルを提唱）とか、ロゴフ (Rogoff, B. Apprenticeship in thinking : cognitive development in social context, Oxford University Press, 1990) の共同体型学習理論（個人の学習は共同体への参加を通して遂行されるというモデルであり、個人のレベルではアプロプリエーション、個人と個人の間の関係は導かれながらの参加、共同体全体としては徒弟制という枠組み中でおこなわれる）とか、レイブ&ウェンガー (Lave, J. & Wenger, E. Situated learning : legitimate peripheral participation, Cambridge University Press, 1991) の正統的周辺参加論（初めは周辺の仕事からはじめて次第に重要な中心的な仕事を任されていき、一人前に成長するという考え）とか、ワーチ (Wertsch, J. V. & Minick, N. Negotiating sense in the zone of proximal development. In M. Schwebel, C. A. Maher, & M. S. Fogley (Eds.) Promoting cognitive growth over the life span. Lawrence Erlbaum Associates, 1990, 71 - 88. Wertsch, J. V. & Bustamante Smolka, A. L. Continuing the dialogue : Vygotsky, Bakhtin, and Lotman. In H. Daniels (Ed.) Charting the agenda. Routledge, 1993, 69-92.) の対話研究（科学的概念と生活的概念との衝突としての授業論、新たな思考の発生装置としての対話論）とかに具体化された。

## 5 おわりに

本稿は、鳥取大学在職中の最後の論文になる。本稿のような構想を得るきっかけになったのは、大学2年生のときに読んだ芝田進午先生の『人間性と人格の理論』（青木書店、1961年）という著書の中の、労働の技術的過程（人間と物との関係）と組織的過程（人間と人間との関係）という概念である。この枠組みから心理学をながめたとき、ヴィゴツキーとピアジェの心理学を理解するための新たな視点を得ることができた。以後、私は、この基本的枠組みからすべてをながめて整理していくという試みをしていくことになった。

そういうことから考えると、芝田進午先生とその著書、『人間性と人格の理論』は私の生涯にわたる恩師であった。

さらに、私は、芝田進午先生が師と仰ぐ、古在由重ならびに戸坂潤の両先生の研究からも多くのものを得ている。もちろん、この三先生は、私のような立場からは、まさに、天を

も仰ぎ見るかのような巨大な星のごとき存在であるが、学問のあり方、あるいは学問の精神ともいうべきものを学ばせていただいたと思う。このような、私のこれまでの私的歴史の一端として、あまり眼に触れることのないと思われる芝田進午先生、ならびに古在由重先生と私の関係に関わる短い文章、およびメッセージを以下に載せておきたい。古在先生からは、その『古在由重全集』の中のどこかにあった言葉であるが、「心理学は事実の学だからつまらない」という言葉が今も私の脳裏に強く残っている。この言葉を絶えず思い出しながら、どうすれば理論的枠組みを前面に出しながら心理学を組みなおしていけるのが、この後の苦痛に満ちた私のささやかな学問的営為を支える一つの原動力となった。

芝田先生との関連では、2002年に桐書房から出版された芝田進午さんを偲ぶ会（編）『芝田進午の世界：核・バイオ時代の哲学を求めて』所収の拙文「芝田進午先生に導かれて」という文章を入れておいた。古在先生との関連では、古在由重の生涯を克明に描いた大著、岩倉博『ある哲学者の軌跡：古在由重と仲間たち』花伝社、2012年の出版を祝い、古在さんを語る会（編）のプログラムに収められている私の拙いメッセージを入れておくことにした。

#### 芝田進午先生に導かれて

高取憲一郎（鳥取大学教授）

私は、芝田先生とは直接お目にかかって話をしたとかという経験はない。ただ、学生時代に一度だけ、芝田先生が京都の確か関西文理学院の校舎であったと記憶しているが、ベトナム戦争の調査から帰国された後の講演会を聞きに行き、その時初めて顔を拝見した。その時の講演では、ベトナムから持ち帰られたボール爆弾の破片のようなものを手にされていたという記憶がある。

私が、芝田先生のお名前を知るようになったのは、大学2年生の時である。当時、私の在学していた大学は紛争中で授業がなく、大学近くの喫茶店で自主ゼミをしていた。そのゼミで教材として使った本が『人間性と人格の理論』であった。文学部の心理学科に所属していた私は、大学で講義される心理学にはどうしても興味を覚えることができなかった。そのような私にとっては、この著書の第一部で展開されているソビエト心理学の成果を踏まえた心理学理論への言及は、まさに目から鱗が落ちるという体験だった。それと同時に、このような大部の本を30歳過ぎで書くことができた人があるという事実を知って、愕然としたことを思い出す。

その後、私は、学部から大学院へと進み、研究テーマに関してはいろいろ回り道はしたが、最終的にはソビエト心理学を中心にして心理学を勉強することになった。やがて、縁があり、鳥取大学教育学部に赴任することになった。赴任して間もない頃、私は、ソビエト心理学の活動理論に沿った研究を続けていたわけであるが、その頃書いた拙い論文を芝田先

生に送った。それに対して、先生からはご丁寧な励ましのお葉書をいただき、感激した。さらに、その後、ベトナムのある心理学研究者がロシア語で書いた論文の訳を、当時の唯研の機関誌に掲載できないかと編集委員会に問い合わせたところ、たまたま芝田先生が委員長をされていたようで、諸般の理由で掲載できないことをお手紙で知らせていただいた。同時に、『マルクス主義研究年報』になにか寄稿しないかと、お誘いいただいた。残念ながら、そのお誘いに対しては、いまだに応えていないわけであるが、面識もない、しかも分野も異なる若輩者に対する暖かいご配慮に対して感謝している。

また、その時頂いたお手紙を今取り出して読んでみると、その中で私に対して唯研への入会を勧められており、私自身の記憶はもう一つははっきりしないのであるが、どうも、それをきっかけに唯研へ入会したもののようである。そのようなわけで、私の手元には、芝田先生から頂いたお葉書とお手紙が、計3通、大事にしまっている。私は、昨年(2000年)、『文化と進化の心理学』（三学出版）という著書を出したが、遅ればせながら、先生の論文執筆のお誘いに対して、その何分の一かは応えることができたかなと考えている次第である。

#### 『ある哲学者の軌跡』の出版を祝い、古在さんを語る会（編）プログラム所収 メッセージ

なお、この語る会は、2013年3月2日に東京労働会館ラパスホールにておこなわれたが、メッセージ参加となった。

このたびは出版を祝う会におさそいいただきありがとうございます。なにぶん、鳥取という遠くの地に住んでいるものですから、メッセージによる参加とさせていただきます。とにかく、この本はいっしょに読みました。近年まれに見る名著だと思います。岩倉博氏のご努力には感嘆いたしました。私は、戸坂潤、古在由重、芝田進午の三先生を師とと思っています。もっともどなたとも会ったことはなく（芝田先生とは手紙を何度か交換しましたが）、自分で勝手に思っているだけです。この本をきっかけにして、学生時代に読んだ古在先生の全集を読み返しています。（高取憲一郎）